

光籃

泉鏡花作

全一章

田舎の娘であらう。縞柄も分らない筒袖の古浴衣に、煮染めたやうな卓拭を頬被りして、水の中に立つたのは。・・・それを其のまゝに見えるけれど、如何に奇を好めばと云つても、女の形に案山子を拵へるものはない。

孟蘭盆すぎの良い月であつた。風はないが、白露の蘆に満ちたのが、穂に似て、細流に揺れて、雫が、青い葉、青い莖を傳つて、點滴るばかりである。

町を流るゝ大川の、下の小橋を、もつと此處は下流に成る。やがて瀉へ落ちる川口で、此の田つゞきの小流との間には、一寸高く築いた塘堤があるが、初夜過ぎて町は遠し、村も靜つた。場末の濕地で、藁屋の佻しい處だから、塘堤一杯の月影も、破窓をさす貧い臺所の棚の明い趣がある。

遠近をちこちの森もりに棲すむ、狐きつねか狸たぬきか、と見みるのが相あ應いしい  
まで、ものさびて、のそ／＼と歩あ行く犬いぬさへ、梁はりを  
走はしる古ふる鼠ねずみかと疑うたがはるゝのに ー

ざぶり、 ざぶり、 ざぶ／＼、 ざあ ー  
ざぶり、 ざぶり、 ざぶ／＼、 ざあ ー

小豆あづきあらひと云いふ變へん化げを想おもはせる。 . . . 夜よな  
中かに洗せん濯たくの音おとを立てたるのは、小流こながれに浸ひたつた、案山子かゝし  
同どう様やうの其その娘むすめだ。 . . .

霧きりの這はふ田川たがはの水みづを、ほの白しろい、箒はらで搔かき／＼、  
泡沫あわを薄青うすあをく掬すくひ取とつては、細帶ほそおびにつけた畚びくの中なかへ、  
ト腰こしを捻ひねり状じまに、ざあと、光ひかりに照てらして移うつし込こむ。

ざぶり、 ざぶり、 ざぶ／＼、 ざあー

おなじ事ことを繰くり返かへす。腰こしの影かげは蘆あしの葉はに浮ういて、さ  
ながら黒くろく踊をどるかと思みえた。

町まちの方ほうから、がや／＼と、婦をんなまじりの四五人にんの聲こゑ

が、浮いた聲音と、もに塘堤をつたつて、風の留つた影燈籠のやうに近づいて、

「何だ、何だ。」

「あゝ、行つてるなあ。」

と、なぞへに蘆の上から、下のその小流を見て、一同に立留つた。

「うまく行くぜ。」

「眞似をする處は、狐か、狸だらうぜ。それ、お前によく似て居らあ。」

「可厭。」

と甘たれた聲を揚げて、男に摺寄つたのは少い女で。

「獺だんべい、水の中ぢや。」

と、いまの若いのに、聲に浮かれた調子で、面を澁黒くニヤ／＼と笑つて、あとに立つたのが、のそ／＼と出たのは、一挺の櫓と、かんてらをぶら下げた年倍な船頭である。

此の唯一つの灯が、四五人の眞中へ入つたら、影燈籠は、再び月下に、其のまゝくる／＼と廻るであらう。

ざぶり、ざぶり、ざぶり、ざぶり、ざあー

髪を當世にした、濃い白粉の大柄の年増が

「おい、姉さん。」

と、肩幅廣く、塘堤ぶちへ顯はれた。立女形が出たから、心得たのであらう。船頭め、かんでらの灯を、其の胸のあたりへ突出した。首拔の浴衣に、淺葱と紺の石松の伊達巻ばかり、寢衣のなりで來たらしい。恁う照されると、眉毛は濃く、顔は大い。此處から餘り遠くない、場末の某座に五日間の興行に大當りを取った、安來節座中の女太夫である。

あとも一座で。．．．今夜、五日目の大人を撥ねたあとを、涼みながら船を八葉潟へ浮べやうとして出て來たのだが、しこみものゝ鮫、煮染、鑊づめの酒で月を見るより、心太か安いアイスクリームで、蚊帳で寝た方がいゝ、あとの女たちや、雑用宿を宿場へ浮れ出す他の男どもは誰も來ない。まだ來ない方の人數が多かつた。

「おい、お前さん。」

と、太夫の年増は、つゞけて鷹揚に、娘を呼んだ。

流の案山子は、……ざふりと、手を留めた。  
が、少しは氣取りでもする事か、棒杭に引かゝつた  
菜葉の如く、たくしあげた裾の上へ、据腰に箆を構  
へて、頬被りの面を向けた。目鼻立は美しい。で、  
濡れ／＼として艶ある脛は、蘆間に眠る白鷺のやう  
に霧を分けて白く長かつた。

「感心　　ー　なか／＼うまいがね、少し手が違  
つてるよ。　　∴　さん子さん、一寸唄つてお遣り。  
村方で眞似をするのに、いゝ手本だ。　　∴　まうけ  
さして貰つた禮心に、ちやんとした處を教へてあげ  
よう。置土産さ、さん子さん、お唄ひよ。」  
「可厭、獺に。　　∴　∴　∴　氣味が悪いわ、口うつ  
しに成るぢやないの。」

と少いのが首とゝもに肩を振る。

「獺に教へれば、藝の威光さ。ぢやあ、私が唄ひ  
ながら。　　ー　可いかい、　　ー　安來千軒名の

出た處……」

もう最も微酔機嫌で、

「さあ、遣つて御覽よ。……鯖すくひさ。」

「ほゝゝ。」

と娘は唯笑つた。

月にも、霧にも、流の音にも、一座の聲は、果敢なき蛾のやうに、ちら／＼と亂るゝのに、娘の笑聲のみ、水に沈んで、月影の森に遠く響いた。

「一寸、お遣りつたら。」

「ほゝゝ。」

笑つてないでさ、可いかい。――鯖すくひの

骨髓と言ふ處を教へるからよ。」

「あれ、私はな、鯖すくひのでござんせぬ。」

「おや、何をしてるんだね。」

「お月様の影を掬ひますの。」と空を仰いで言

つた。蘆の葉の露は輝いたのである。

「月影を」

「あはゝ、などと言つて、此奴、色男と共稼ぎに汚穢取りの稽古で居やがる。」

と色の黒い小男が笑出すと、角面の薄化粧した座

長、でつぷりした男が、

「月を汲んで何にするんだ。」

「はあ、暗の夜の用心になあ。」

此奴は薄馬鹿だと思つたさうである。後での話だが、  
「些と狐が憑いて居るとも思つたさうで。」

「そのいづれにせよ、此の容色なら、肉の白さだけでも、客は引ける。金まうけと、座長の角面はさつそくに思慮した。且つ誘拐ふに術は要らない。」

「分つた／＼、えらいよお前は。――暗夜の用心に月の光を掬つて置くと、策の目から、ざあ／＼洩ると、畚から、ぼた／＼流れると、ついでに愛嬌はこぼれると、な。……此の位世の中の理屈の分つた事はねえ。感心だ。――處でな、おい、姉え。おなじ月影を汲むなら、そんなぢよる／＼水でなしに、湯へ出て、そら、ほつと霧のかゝつた、あの、其處の山ほど大きく汲みな。一所に來な、連れて行くぜ。」

女太夫に目くぼせしながら、

「俺たちは、その月を見に瀉へ出るんだ。――  
一所に來なよ、御馳走も、うんとあらあ。」

「ほう、來るか、猫よりもおとなしい。いま  
のまに出世をするぜ、いゝ娘だ、いゝ娘だ。」

と黒い小男が囁した。

娘は、もう蘆を分けて出たのである。露にしつと  
りと萎へた姿も、水には濡れて居なかつた。

すぐ川堤を、十歩ばかり戻り氣味に、下へ、大川  
へ下口があつて、船着に成つて居る。時に三艘ばか  
り流に並んで、岸の猫柳に浮いて居た。

(三界萬靈、諸行無常。)

鼠にばやけた白い旗が、もやひに搦んで、ひよる  
／＼と漾ふのが見えた。

「おや、塔婆も一本、流れ灌頂と云ふ奴  
だ。……大變なものに乗せるんだな。」



座長が眞さきにのりかゝつて、ぎよつとした。三艘のうちの、一番大形に見える眞中の船であつた。が、船べりを舐めて這ふやうに、船頭がかんてらを入れたのは、端の方の古船で。

「旦那、此方だよ。……へい、其は流れ灌頂ではござりましねえ。昨日、孟蘭盆で川施餓鬼がござりましたでや。」

「流れ灌頂と兄弟分だ。」

「可厭だわねえ。」

「一蓮托生と、さあ、皆乗つたか。」

と座長が捌く。

「小父さん、船幽霊は出ないこと。」

と若い女が、ぢやぶ／＼、ぢやぶ／＼と乗出す中に、怯えた聲する。

「元げたのだらう。月に青道心のやうで、さつきから黙りの老人か、

「船幽霊は大海のものだ。瀉にはねえなあ。」

「あれは生擒つて錢傾けだ。」

ぎい、ちよん、ぎい、ちよんと、堤の草に蟋蟀の  
紛れて鳴くのが、やがて分れて、大川に唯櫓の音の  
み、ぎい、と響く。ぎよ、ぎよと鳴くのは五位鷺  
だらう。

「なむあみだぶつ。あゝ、いゝ月だ。」  
と寂しく掉つた、青道心の爺の頭は、ぶくりと白  
茄子が浮いたやうで、川幅は左右へ展け、船は霧に  
包まれた。

「變な、月のほめやうだな、はゝゝ。」と座長  
は笑ひ消しつゝ、

「おい、姉や、何うした。」  
と言ふ。水しやくひの娘は、剥いた玉子を包みあ  
へぬ、あせた緋金巾を掻合せて、鵜が赤い魚を銜へ  
たやうに、舳にとぼんと留つて薄黒い。通例だと卑  
下をしても、あとから乗つて艦の方にあるべき筈を、  
勝手に知つた土地のものゝ所爲だらう。出しなに、  
川施餓鬼で迷つた時、船頭が入れたかんでらの火よ  
り前に乗つて、舳にちよなんと控へたのであつた。

實は、此は心すべき事だつた。……船につ

くあやかしは、魔の影も、鬼火も、燃ゆる燐も、可  
恐き星の光も、皆、ものゝ尖端へ来て掛るのが例だ  
と言ふから。

やがて、其の驗がある。

時に、さすがに、娘氣の慇懃心か、あらためて呼  
ばれたので、頬被りした手拭を取つて、俯むいた。

「あら、きれい。」

「まあ、光るわねえ。」

安來ぶしの婦は、驚駭の聲を合せた。

「一寸、何、其の簪は。」

銀杏返もぐしや／＼に、掴んで束ねた黒髪に、琴  
柱形して、晃々と猶ほ月光に照映へる。

「お見せ。」……とも言はず、女太夫が、  
間近から手を伸すと、逆ふ状もなく、頬を横に、鬢  
を柔順に、膝の皿に手を置いて、

「ほゝゝゝゝ。」

と、薄馬鹿が馬鹿笑に笑つたのである。

年増は思はず、手を引いて、

「えゝ、何だねえ、氣味の悪い。」

生暖い、腥い、いやに冷く、かび臭い風が、颯と渡ると、箕で溢すやうに月前に灰汁が掛つた。

川は三つの瀬を一つに、どんよりと落合つて、八葉瀉の波は、なだらかながら、八つに打つ・・・星の洲を埋んだ銀河が流れて縹渺たる月界に入らんとする、恰も瀉へ出口の處で、その一陣の風に、曇ると見る間に、群りかさなる黒雲は、さながら裾のなき瀧の虚空に漲るかと倦まれ、暗雲忽ち陰慘として、灰に血を交ぜた雨が飛んだ。

「船頭さん／＼。」

「お船頭々々」

と青坊主は、異變を恐れて、船頭に敬意を表した。

「苦があるで。」

「や、苦どころかい。」

「あれ、降つて來た、降つて來た。」

聲を聞いて、飛ぶ鷺を想つたやうに、浪の羽が高

く煽る。

「着ける、着ける、早くつけてくれ。」

晝は鴻魚の市も小さく立つ。――村の若い衆の遊び處へ、艫數三十とはなかつたから、船の難5 38はなかつた。が、堤尻を駈上つて、掛茶屋を、やゝ念入りな、間近な一ぜんめし屋へ飛込んだ時は、此の十七日の月の氣勢も留めぬ、さながらの闇夜と成つて、篠つく雨に凧が荒んだ。

侘しい電燈さへ、一點燭の影もない。

めし屋の亭主は、行燈とも、蠟燭とも言はず、眞裸で慌て惑つて、

「お佛壇へ線香ぢや、線香ぢや。」

と、ふんどしを絞つて喚いた。

恚る田舎も、文明に馴れて、近頃は……餘分には蠟燭の用意もないのである。

「……然うだ、姉え。恚う言ふ時だ、掬つた月影は何うしたい。」

と、座長の角面がつゞけ状に舌打をしながら言つた。

「眞個だわ。」

「まつたくさ。」

太夫たちも聲を合せた。

不思議に、螢火の消えないやうに、小さな簪のほのめくのを、雨と風と、人と水の香と、入亂れた、眞暗な土間に微に認めたのである。

「あゝ、うつかりして忘れて居ました。船へ置いて来た、取つて来ませう。」

「ついでに、重詰を願ひてえ。一升罈は攫つて来た。」

と黒男が、うは言のやうに言ふ間もあらせず、

「やあ、水が来た、波が来た。……薄馬鹿が水に乗つて来た。」

青坊主がひよろ／＼と爪立つて逃げあるく。

「お佛壇ぢや、お佛壇ぢや、お佛壇へ線香ぢや。」

「はい、取つて来ましたよ。」

と言ふ、娘の手にした畚を溢れて、湧く影は、青

いさゝ蟹の群れて輝くばかりである。

「光を……月を……影を……」

今。

「と凜と言ふと、畚を取つて身構へた。向へる壁の煤も破れも、はや、ほの明るく映さるゝそのたゞ中へ、袂を拂つてバツと投げた。間は一面に白く光つた、古畳の目は一つ一つ針を植ゑたやうである。」

「あれ。」

「可恐い、電。」

と女たちは、入りもやらず、土間から框へ、背、肩を橋にひれ伏した。

「ほゝゝ、可恐いの？」

娘は靜に、其の壁に向つて立つと、指をしなやかに替を取つた。照らす光明に正に視る、替は小さな斧であつた。

斧を取つて、唯一面の光を、端から、丁と打ち、丁と削り、こと／＼こと／＼と敲くと、その削りか

けは、はら／＼と、光る柳の葉、輝く桂の實にこぼ  
れて、疊にしき、土間に散り、はた且うつくしき工  
人の腰にまとひ、肩に亂れた。と見る／＼風に従つ  
て、皆消えつゝ、やがて、一輪、寸毫を違へざる十  
七日の月は、壁の面に掛つたのである。

残れる、其の柳、其の桂は、玉にて縫へる白銀の  
蓑の如く、腕の雪、白脛もあらはに長く、斧を片手  
に、掌にその月を捧げて立てる姿は、瀉も川も爪さ  
きに捌く、銀河に紫陽花の花籠を、かざして立てる  
女神であつた。

かへりへ  
顧みて、

「まゝゝ。」

微笑むと齊しく、姿は消えた。

壁の裏が行方であらう。その破目に、十七日の月  
は西に傾いたが、夜扱く熙りまさつて、拭ふべき霧  
もかけず、雨も風もあともない。

這へる鳶の白露が浮いて、村遠き森が沈んだ。



咬々として、夏も覽えぬ。夜ふけのつゝみを、一行は舟を捨て、鯨と、鰯とが、寺詣をする状に、しよぼ／＼と辿つて歸つた。

ざぶり、ざぶり、ざぶ／＼、ざあー  
ざぶり、ざぶり、ざぶ／＼、ざあー

「しいツ。」

「此處だ……」

「先刻の處。」

と、聲の下で、噴きつれると、船頭が眞先に、續いて育坊主が四つに這つたのである。

「――後に、一座の女たち――八人居た――  
樂屋一同、揃つて、刃を磨いた斧の簪をさした。  
が、夜寝ると、抽、白粉の淵に、藻の亂るゝ如く、  
黒髪を散らして七轉八倒する。」

「痛い。」

「痛い。」

「苦しい。」

「痛いよう。」  
「  
「苦しい。」  
「

唯一人……脛すらりと、色白く、面長な、  
目の涼しい、年紀一十九で、唄もふしも何にも出来  
ない、總踊りの時、半裸體に蓑をつけて、櫂をつい  
てまはるばかりのあはれな娘のみ、斧を簪して仔細  
ない。髪にきら／＼と輝くきれいさ。

【完】